



語り手 齋藤トシエさん(明治32年生まれ)  
収録・昭和35年9月24日

あらすじ

昔、ある百姓家に直次郎という亭主がおり、十一ぐらいな息子がいた。「長いこと京の本願寺い参らんけえ、参つて来たい。留守う頼む。今夜二時ごろ発つて、二晩泊まり三日目にもどるけえ。」  
直次郎は出発した。夜が明け、易者の前を通りかかると「相に悪いところがあるけえ見てあげる」と言う。「しようがなあのう」。直次郎は見てもらった。易者が「これは『大木より小木』上の間より下の間『短気は損気』と出とるけえ、そのことに気をつけんさい」ということだった。

「易者なんか『八卦八段嘘九段』で合やあせん」と京へ向かいました。

よいお天気だったが、黒雲が出て稲光がし、雷が鳴りはじめた。「易者が『大木より小木』ちゆうたけえ、大きな木の下に行くまあ」と笹藪へ入っていたら、雷が大きな木に落ちた。「嘘じゃあないのう。三文の価値はある」と思ったそうです。

それから日が暮れかかって、野中に一軒だけ家があった。頼むとこの家でや賄して食わすることができん。寝せるだけなら寝せてあげるけえ」と言った。

「易者が『上の間より下の間』言つたから、このよい間へ寝ず、次のぼろの間に寝よう」と、ぼろな部屋に寝た。夜中の丑三つごろよい部屋の天井が落ちたので夜が明けないうちに出た。それで難を二つ逃れた。

いよいよ本山に参つて、三日目に帰っていたら知った男に会った。その男は直次郎さんの嫁さんがほしくて、憎んでいたのです。それで「帰ってみなはい。かかさんは若あ男を抱あて夜も昼も寝とんなるけえ。わしやおまえさんとこへ行って見たが、若い男を連ろうて夕べも今日も寝とつたで」と言つたそうなの。

やさしい直次郎さんも腹がたつた。「わしやあ京参りをしても何のことだか分かりやあせん。生かしておかりやあせんと一生涯命に帰って、草鞋も脱がずに、「今もどつたぞ」と言つたら「あわたしんさつたかね。こな子あ、ハシカが出て熱がして、とつて

もいたしゅうてならんようなから、わしや連れて寝とるが」。十一になる息子だから若いのは若い。「三文出して見てもろうてよかつた。『短気は損気』言つたが、本当に具合が悪かつたんか」「おまえ、どう立腹してもどんさつたか」「じつはおまえ、留守にこうこうで若い男を引っ張つて入つたと言われ、腹が立つてならんかつたが、分かつた。子どもの具合が悪かつたんか。おまえも寂しゅうて心配したろう」。

三文出して易者が言うたことがみんな合つて、喧嘩もせずすみ、息子の病気も治つたという話です。

解説

筆者がこのような口承文芸(民話・わらべ歌・労作民謡など)を収録し始めた二十五歳の三隅中学校教師だったころのうかがつた話であり、今聴いても懐かしい。

稲田浩二『日本昔話通観』の分類では、「むかし語り」で「知恵の力」の中に「話の功德」として登録されているのが、それである。

(元島根大学法文学部教授)

